

## 石川信義著 『鎮魂のカラコルム』

精神科医の著者がリタイアを機に、40年前に副隊長・登攀隊長として参加した東大カラコルム遠征隊の思い出を辿りつつ、カラコルムのキンヤンキッシュ（7852m、パキスタン）を再訪した旅日記である。遠征隊は隊員1人を頂上直下の雪崩で失って敗退した。著者は、この若くして亡くなった岳友やそれ以後に鬼籍に入った隊員3名（その内の1人は山崎豊子「沈まぬ太陽」の主人公のモデル）の友情を肩に、40年振りに74歳という老齢で遭難地点が見える氷河まで登って追悼のケルンを建てて来た。絶壁を2000mも落下して氷河に叩き込まれたであろう遭難者は捜索する術もなく、そのまま現地に置いてきたという40年来の痛恨が著者をこの困難な旅に駆り立てたと書いている。

とは言え、この旅の印象を横糸に、当時の追憶を縦糸にして編まれた文章には暗い翳は感じられず、最初は気になったベランメエな語り口も読み進むうちに自然体となって、未だ見ぬカラコルムの自然や旅の様子に引き込まれていった。

圧巻は、まさか会えると思ってもいなかった当時の高所ポーター2人が老体ながら未だ生きていて再会を喜び合った時の感動の様子である。その内の一人は著者が彼らの村に別れを告げた時、寝ていて別れの挨拶ができなかったからと、徒歩で2日も掛かる町まで歩いて著者が泊まっていたホテルを尋ねて来たそうである。随所に挿入された著者自身によるスケッチも楽しい。

岩波書店 2006 年刊



[「山書の小溪」目次に戻る](#)